

明和池遺跡 現地公開資料

平成23年10月29日(土)

主催:摂津市教育委員会・大阪府教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター

調査に至る経緯と経過

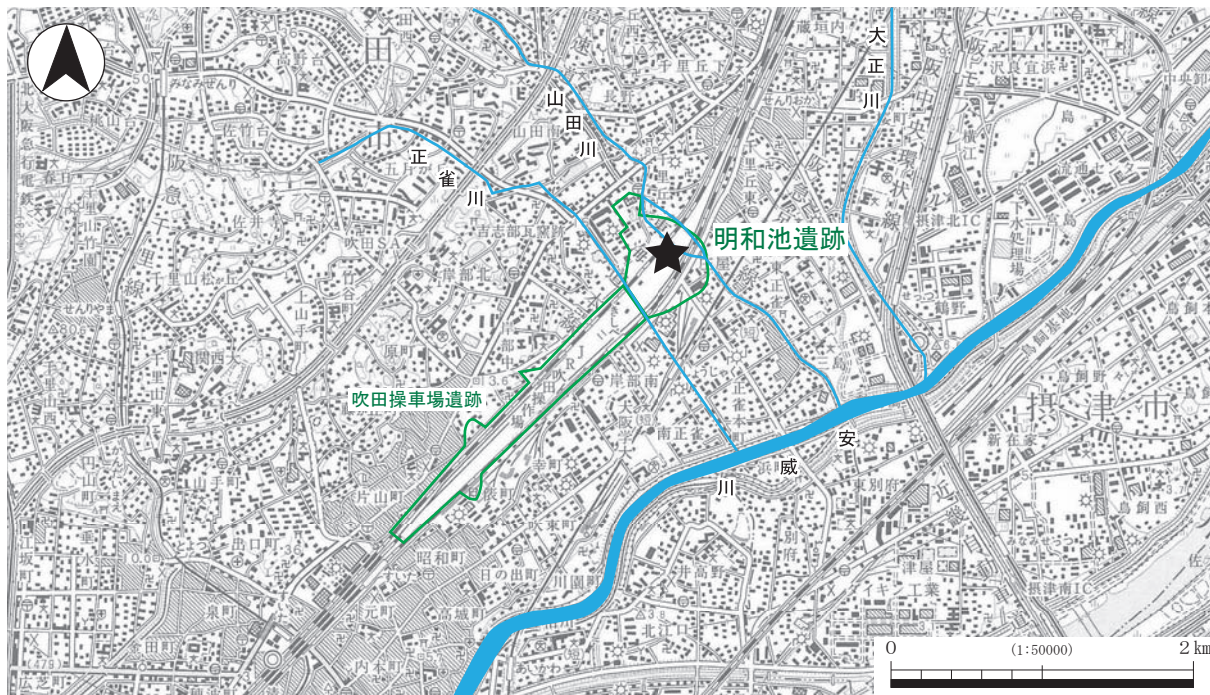
今回の発掘調査は、平成22年より実施しております吹田操車場跡地土地区画整理事業に先立つものです。吹田操車場跡地は摂津市と吹田市にまたがる広大なもので、摂津市域の操車場の跡地には明和池遺跡があります。

明和池遺跡は昭和8年の工事の際、池の底から古墳時代の須恵器が発見されたことをきっかけに知られるようになった遺跡です。当遺跡の本格的な発掘調査は、昭和62年におこなわれました。その結果、明和池遺跡のある場所は、古墳時代より集落が営まれ、鎌倉時代や戦国時代に至るまで人々の生活した場所であったことが分かりました。

平成10年と平成19・20年には、確認調査がおこなわれ、当時の生活面からは、井戸や溝の跡、ほったてばしらたてもの掘立柱建物と呼ばれる、地面に穴を掘りそこに柱を立てた建物の跡などが検出されました。また弥生土器や古墳時代の須恵器、飛鳥時代の土器・土馬などの貴重な遺物も出土しました。

平成22年からは、吹田操車場跡地土地区画整理事業に先立つ発掘調査をおこなっています。調査では、弥生時代後期の集落跡を検出しました。人々が生活していたことを示すものとして、たてあなたてもの竪穴建物と呼ばれる地面を掘り下げて床を造った建物が7棟確認されました。また、こうした建物のすぐ脇で当時の川が検出され、川べりからたくさんの弥生土器が発見されました。

今回の発掘調査は、土地区画整理事業にともなう調査の一環で、平成22年の調査で弥生時代後期の集落跡が確認された場所の延長部分を対象としています。調査面積は約430㎡です。調査は平成23年7月6日からおこなわれ、現在も進行中です。この度の調査で明らかになってきた、この地域の昔の様子をご紹介します。



調査地位置

(国土地理院「大阪東北部」S=1/50000 1998年12月1日発行 に加筆)

調査の成果

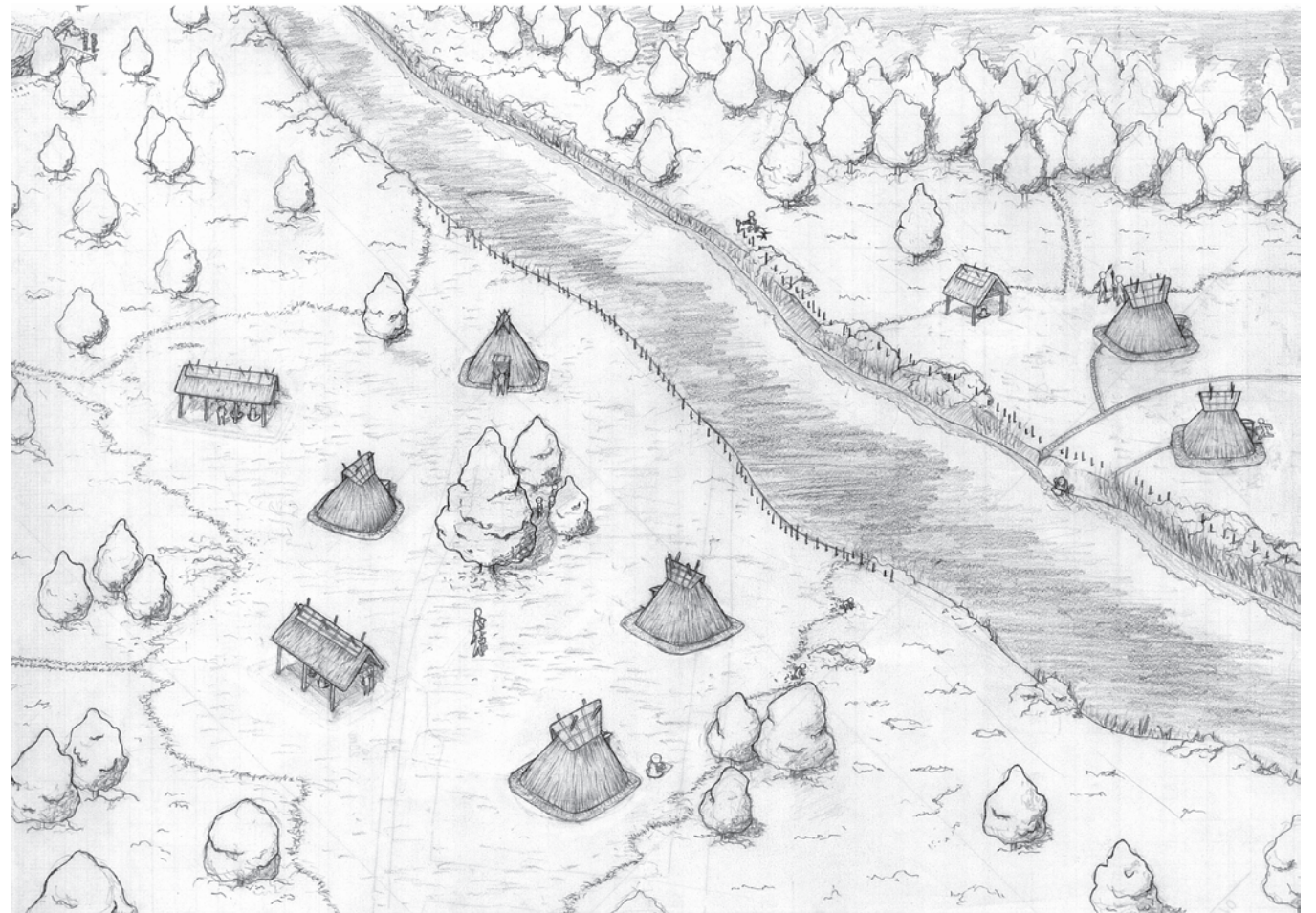
発掘調査は、地層の断面を観察して、土の堆積状況を確認しながら掘り進めていきます。通常は、深く掘れば掘るほど古い時代の痕跡が見つかります。

今回の調査では、まず現在の地面から約1.2mの深さにわたって、吹田操車場を造ったさいの盛土を確認しました。そこからさらに約1.0m掘り下げ、古墳時代後期(今から約1,400～1,500年前)の川の跡や井戸の跡を検出しました。川の跡からはたくさんの須恵器と呼ばれる、青灰色の焼物が出土しました。

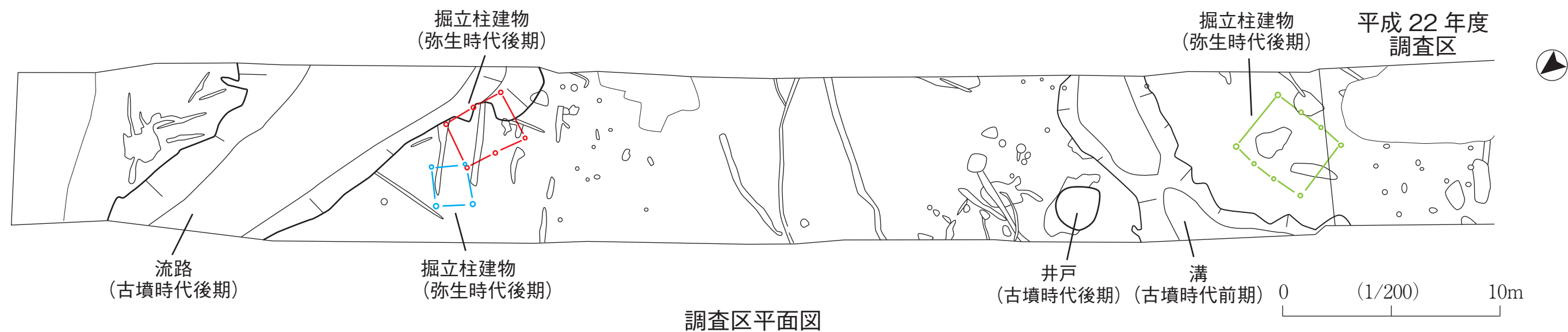
最終的には古墳時代の遺構面を約20cm掘り下げ、弥生時代後期(今から約1,800～2,000年前)の掘立柱建物3棟、溝、土坑などを検出しました。

今回の発掘調査の成果はおおきく2つあげられます。1つ目は、昨年度に調査された弥生時代後期の集落の広がりを確認できたことです。当地の集落には、たてあなたてもの竪穴建物と掘立柱建物の2種類の建物があったことがわかりました。

2つ目は、古墳時代後期の川の跡から、たくさんの須恵器が出土したことです。興味深いことに、出土した須恵器の多くが、ゆがんでいたり、十分に焼けていないような不良品でした。摂津市に隣接する吹田市では、古墳時代の須恵器を焼いた窯が数多くみつかっています。出土した須恵器は、吹田市域の窯で焼かれたものとよく似ています。今回の調査地の付近に、窯で焼かれた須恵器を選別するための場所があったのかもしれません。



弥生時代集落のイメージ図



調査区全景（南西から）



流路内の須恵器出土状況（北から）



井戸出土状況（南東から）



流路出土須恵器

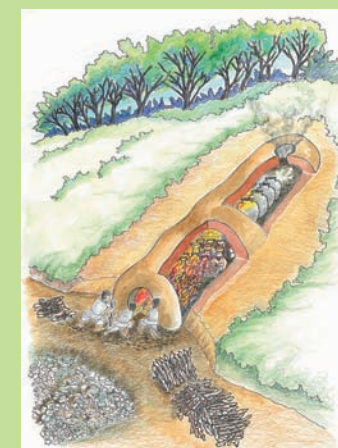


井戸出土須恵器

用語解説

須恵器とは？

古墳～平安時代の青灰色を呈する焼物を指します。5世紀に朝鮮半島から技術が伝来し日本で製作されるようになります。その技術の特徴は、回転台（今で言うロクロ）を使用した成形技法と窖窯による焼成技法です。窖窯とは、斜面地を利用して焚口から煙出しまでひとつながりの長い穴になった窯で 1000℃以上の高火度を保つ構造を持ちます。須恵器は古墳の副葬品として用いられた他に、食器や貯蔵具として広く使用されていました。



あながき
窖窯による作業風景
(近つ飛鳥博物館提供)